繪本甲越軍記三編

四

2258
28

門へ遠13
帙2278
巻28

池清

繪本甲越軍記三編卷之四

目録

佐久郡合戰之事
松井田越前守勇戰之圖
甲越両軍勢と返と事
使者急と告ふ圖
大益小幡忍監之事
石坂平家を落ス圖
北条氏康今川と頼ゝ武田ゲ軍と上原事

572

軍議評論の図
法福寺合戰之事

信州佐久郡合戰之事

天文十九年三月武田大膳太夫晴信再び上野國より出馬し松井田城ホ攻寄松井田城前守と合戰あり愛ホ信州の小笠原長時より晴信が上野國より馬を出せるを聞て武田が信州へ奪ふ地と奪んと木曾義昌と謀り合せ小笠原ハ下諏訪より出張して敵地と故火を木曾より鳥居峠迄攻と出ける上州ホ聞へしかば晴信松井田の戰ひと捨置上野と陣拂ひ信州上諏訪ホ引返し給ひ小笠原と追出明さば木曾ハ戰つゞいてべーと秋山伯耆守摂田十郎兵衛安間三郎右衛門市川梅印同傳五郎が勢ゝて木曾と押へさせ小笠原と対人と猛採へあるよ

四月六日越後小遣ヒ申ス間者弛ミ申ス様長尾景虎地
蔵峠ヨリ越後佐久郡迫働くべき動揺の由注進申ス候ハヽ景虎北
大敵ヲ引受ケ敵ヲ捨テ速ヤカニ越後勢ヲ防ンヲ内藤修理正
馬場民部少輔日向大和守山本勘助ト軍議ヲ山本勘助申様
越後勢佐久郡ヘ働ク支度ヲ候由然ハ味方ヲ猿ケ馬場ヘ上リ
深志ノ道ヲ取切ル本陣ヲ高綱ニ置ク敵ヲ必屋リノ彼方善光
寺山ヲ押ヘ切ル陣ヲ取ラルベシ地利ヲ信ル孔明ガ八陣ノ備ヘヲ
布敵ヲ死門ヲ引入越後勢ヲ一挙ヲ敗ラル景虎ヲ死門ヲ入
ヒガ変法ヲ操ル敗ラル候ベシ小笠原ガ備ヲ長坂左二門
尉相木市兵衛芦田下野守ヲ派遣小豫ヒ四月十日武田ガ惣軍
猿ケ馬場ヘ上レバ山本ガ思慮ヲ違ハズ景虎ハ善光寺山ヲ

で陣ヲ取ラル同十日武田勢ヲ森原ヨリ押出シ飯富兵
部少輔小山田備中守佐京亮彈正忠武田典厩信繁穴山伊豆
守馬場民部少輔内藤修理正浅利式部丞日向大和ヲ諸角豊後
守真田利藤蔵其外先方ヲ諸大将ヲ作奉ル兵部草間
備前守保志奈彈正小笠原新弥戸田大隅守鳥大貳小幡左三
右二門早川豊後守古畑伯耆守小林尾張守青木尾張ヲ依田
右京亮門安部加賀守高木蔵人小原下総守島野加賀守保
坂常陸守芦澤伊賀守三浦右近横田駿河守三浦左近
田丹波守菴原弥右二門松尾下条海野屋代西宮上尾大室
綿内小田切栗田山部草川西条赤沢吉御時田矢澤小野山
揺井間田鞠子武師尾木山口榛貝大津与羅東之原地九坪

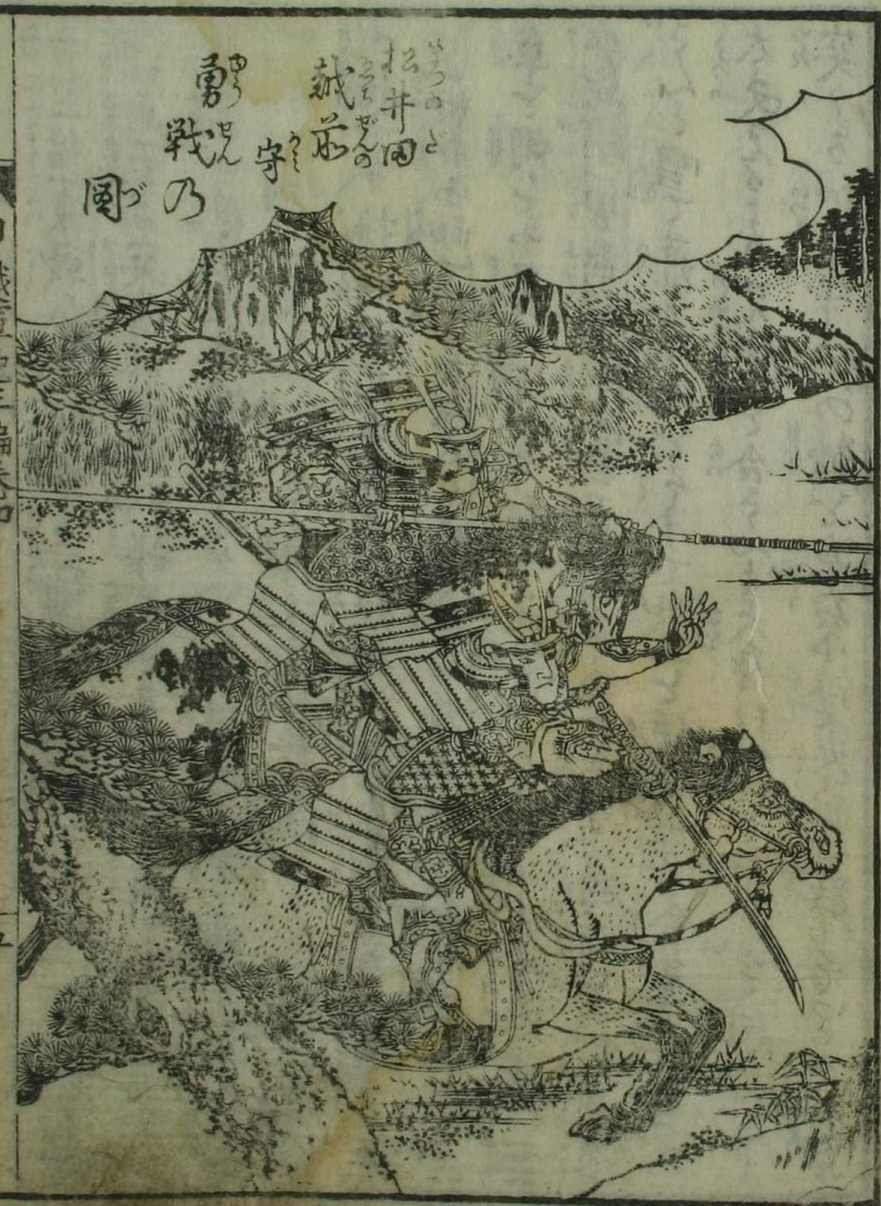
光寺・松岡・塩崎・小泉・諸賀・稲津・大崎・門田・羽武・赤沢と云
名将・勇士ども従ひ後陣ゆゑ栗原左衛門尉・小山田左兵衛尉
原・加賀守・遠藤・ゆり・惣軍一万三千・徐人八陣と布列し敵
らべ一拉と碎くと寄ると遅くと待くろ斬く就後方ゆい宇
佐美駿河守定行敵備へ近く仕候と為て三度駆て中々敵
の惣勢八九一万二三千を相ゑ陣三と八箇所三列厳密備ふ
といへども中黒の巴の紋付くろふ旗の一手而已備へ浮く見へ候と
委布申ければ景虎完乎と笑ひ夫程必定聞及んぐる越後の山
本勘助斯が謀略と覚へくろ孔明が八陣と儲け死門と疎け
我をして此陣を敗引入き一人も洩さじ討んと謀まろ我実此
謀略を陥ぐんや敵の謀斗ふ付て待所の死門より切入く奇多

の術と儲けて八陣と粉の如く打潰し晴信が旗本を切て入互の
勝負と変じ泡と吐て呑んど物と古志郡河守宇佐美駿河
守・柿崎和泉守・斎藤下野守・館四郎兵衛尉・島和泉・橋爪・行
俱三河守・北条丹後守・須田相模守・大崎・流・茶守・上田・紀理山吉
玄蕃・元吉江・織部・鬼小島弥太郎・万貫寺源蔵・長尾七郎・永井
善左衛門・田原左衛門尉・上野源六郎・山吉丹波守・同弥右衛門・平子
孫太郎・嶋倉内匠・小斎孫八郎・川田・対馬守・須賀但馬守・青川
十郎・松本大学・山本寺伊豫守・村山与七郎・鮎川・摂津守・長尾
包四郎・元井日向守・大国主水・入道水間掃部頭・松川大隅守・石川
備後守・下平弥七郎・宮嶋三河守・大貫五郎兵衛・柏崎弥七郎と
始め就後方の惣勢一万余人寄爰の備へと布て犀川と押

両陣あハや近付と挑り合ひ足軽と操出し数百挺鉄炮と放ち
撃黒煙天中より鯨波と作り鎗襖と一齋に造り喚と喚てかゝ
る武田長尾度々対陣と為ると雖も未だ十分に戰ひ合ひけ
ればとて敵も味方も壮士等るつゝ皆〳〵猛勇を奮ひ甚
だ〳〵き事なり山と雖も裂べき勢ひにて雖も引べきや鳴る
呼ぶ声なり山谷と動く〳〵歩合に鋒先の光うハ霄光の疑ふみ
異あらぬ利氣天と貫く戰ひ〳〵が武田方ふも強後十事ふ
きば死門と備へ〳〵日向大和守が勢ぞ〳〵と切崩され敗〳〵ふ
敗走に就後方撰ま乗く是と追ひ忽ち堅陣ふ取囲れ一人も
生と得べき者なきざるふ長尾勢も之ふ敵と追ど茶後ま
勢とをうへ逃ると捨く飯富兵部ふ補佐奈多弾正忠宛山伊

豆守が備ま打てかゝふ武田勢味方と励し自鎗を合せ矢吉と出
く戰へべるゝ一人も後ろべき保坂常陸守昌澤伊賀守佐
野兵右工門馬場八左衛門川手惣太夫右泉大学古畑伯耆
守小宦五郎兵衛辻宦兵衛久保勘左衛門等獅子ふ移ふ
如くふ働けば長尾方ふも援崎和泉守須田相摸守上田繕理自
身ま得物と閃うて疑ひうふ鉄孫太郎唐崎孫治郎大貫
五郎兵衛坪賀宗助大搗弥治郎石川備後守沼掃部高木公
内膳等猛虎の吼る勢ひと血煙と空ま霞鏈せ我かうどと
挑み戰ふ拾ふ支弾正忠ふ鎗と叱くと後つく摸先ま
向ふ敵三人と突伏ふ敵勢ふも修羅王の如く猛勢當うべ
見べるゝ須田相摸守が組石田原左右左衛門と名乗弾正ふ鎗と

576



会せ一往一来戦ひありが佐奈多猛けく一声鳴くとゑんーゲ左右左衛
門と呂一突ゑ突落ば間瀬刑部是と見て馬と乗して突まわ丁く
とお合せ受つ流ーつ戦ひーグいろで弾正が勇士敵せん中間瀬
刑部胸板と突貫き馬より真逆様おでと落こうろ長尾方の
大将ゆち掠崎和泉守景家鉄棒の如き大太刀とお振雪り者
と雖おゆ切て廻ふ此太刀陰よ向ゆ者鉄甲も衣も用ちゆば呂
草と倒さゆ異ば徐よ冷敷そ見こうろ武田方よ遠藤伊賀
守定国勇無双の壮士長刀と風車のめく廻ー掠崎と一刃よ刎落
さんと呼て鬼う秘術とそーて戦ゆと伊賀守が舎弟遠藤軍
太夫ろるよう只ゆ力と合さんと大身ち鎗ととどめて同く掠崎よ
突ろう和泉守二人の敵と左右ゆ受火の花と散ーていぐむ迫み

掠崎が組大将下平弥七郎弛まり事手ご手と塞ば候得ば其
敵基よ給ろれとりまち伊賀守ゆ突こかろ遠藤怒つく身と
返さんところ間よ弥七郎鎗取延く遠藤が乗ろ馬の太腹と
二突通突通ば何ろ以く耐ろべき馬くもゆ倒ろと飛ちて
首と取分軍太夫も鎗の柄と掠崎よ切折と太刀と接んところ
処と和泉守飛廻ぐ軍太夫が胃より胸板迄空竹破よ斬下へ
目覚ーくこそ見べうろれ

甲越の両軍勢と返ば車

都こ今日の合戦両家ち士大将と始め勇士歩卒は至ろ迄名と
惜ろ義と励ーー我おかーと戦ゆ車ろれば呼ぶ声山と震ーー
人馬ち馳違ゆ音地と裏ーー目さへ合ゆ暇おく両家の勝敗い

世一戦まはらんと見へしかども不思議の変怪発りて甚原と呼る
る景虎所日善光寺山に旗本と定給ふの時大熊備前守朝
秀ちから雄卒六町斗りと放れ陣を取うしの士卒も今夜焼く
べき薪の料と取んが為近辺を廻り竹木と伐民家を壊ち
神地と犯しかれば祢宜祝等大に驚き大熊が陣屋にまゐり
士卒なるが狼藉と術へ當社明神とまへ奉る神猿田彦大神にて
御渡れ給ひ霊験あらたなる御社あり柳此御神い瓊々杵
尊天上より降臨仕給ふ時前駆まん御神にて山王にてい
早尾神と申熟田にてい源太夫といひ又道祖神にて中古
紀ってい船魂海邊にてい塩土翁と号し軍陣を守りて幸と
得させ給ふ奥助も神四討も赫然くなせ給ふ霊神の神

地と犯し給ふん事御四討の程も恐くいかば速に軍勢等が乱妨と
止め給ふべしと然れども備前守嘲笑い霊神にもせよ霊仏
ふもいれ軍陣に要ある用ひんに何の恐れや有べきぞ我と威と
祝等が申条狂僧なれ迚拝殿迫とるあこぼち其夜の薪に焼捨
ん神其無礼を怒め給へりや其夜大熊が陣中鳴動とる亦と
驚しく翌二日武田長尾戦ひと交ある処一天俄に掻曇り白昼
と消し一圃に黒雲空中と三廻り三廻りして武田が陣の上に舞下
つて又山風に吹き長尾が陣とさして靡く霞ひあらやとりて長尾
が陣の旗指物風に靡くがせしごとくと鳴くとめく響くあるく黒
雲も四方へぐりと散失うり大将景虎此天変とうりうり是凡軍
なるべしと宇佐美駿河守と倶に先勝に地出来牌と頒て軍勢と

須臾に引揚給へハ晴信も此怪異に驚き山本勘助と引具し
先勢に出て同じく勢と引揚給ふ両將ハ指揮の迅速なるに大
清に一時に引ぬく両軍の操引体もあらも手足と遣ふに異
ず縁に目と驚くべし其夜も亦大篝を燒て一夜と明し翌
日ハ引く越後の陣より昆の字と書たる指物を武者一騎
を文と竹に狹へて擔げ行ふ綱にて馬と乘出し武田が陣近
き小高き処にてるるとりて文狹へたるとりて突たる
とうへく武田が陣より鉄炮と両のめく打れるもあ
り閉しと腰より扇と取出し打ふりて敵の方と三度迫歩招き
又馬に乘て徐ろと立帰る武田が陣より黒の馬に赤毋衣うけ
たる武者一騎乘出て此竹と提持て立帰り晴信に献ふ其文に

曰く陣と拂ひ軍と征登越中の間に出し征伐を べき間貴殿も
暫く軍を休めらるべし勝敗を追て変し候べき旨と書送まつり
きぶくく在く武田が陣より蛭と書たる指物の武者一騎竹に文
と狹へ長尾が陣近く持来りて立置く立飯る長尾が陣より
始の武者又乘来りて紙文と取て景虎に献る其文に曰當
陣と拂ひ越中征登發向の事を兼て早ぬ聞る上も當家軍を
班し候べ抑両家干戈と交ぬる事も偏に村上が還住計に
ふ依処なり此義と思ひ止て給ふ時も何の遺恨か有べきや両
陣の贈答に早り景虎も本國に勢と飯し晴信も海津に
引退く六月甲州に帰陣仕給ひる
越後軍記曰ク六月十日申の刻に景虎使者を以て明十一日

一戰に及び候ものと晴信心得中にと返答して備を定め
十一日卯の刻に打出でる中略武田勢森の如く押出し殿く
に備をなす以見て景虎も犀川を打渡り備を立既に合
戰に及ぶ小景虎衆人の機を引て武田の備への色をうん
為黒雲小車寄人數を引揚給ふ様に奇妙のなりなり云云
編者云黒雲の車天變と謂べき程の事かなれば廻船
烈しき物なれば景虎程の猛將が勝敗を分らざる戰ひ
最中是程に廻船に驚いて軍を納る將小あらば緒記録と
參考なる小景虎前日大熊備前守に命じて神地を犯せ
世戰ひ敵陣堅固にして破れざると見べ神異あると稱して
速に軍をなすべ天運は也利なるべ

迫に打迫ぐ敵と取組んと巧みに武田方計あぶれ
難れと察し廻船と車小軍と引拳捨奸と渡け敵の後
と襲ん時取て返して討崩さんと謀らんと晴信又なれば
あれば景虎が敗れざる察し雄壯の軍勢等が敵の
機関に陥んと恐れ晴信も又天變に驚き怪しもて
く急に引拳られるなるべ兩名大將計軍略
知ふべき処に成べ

大益小惜恐懸の車并石投車家と謂る車

却説去る四月十日長尾武田信州佐久那犀川に對して戰ひと
交へんとする所に不思議の怪異に見く兩軍勢と引退
景虎も越後に軍と班し晴信も海津小退く滯坐あり爰小

581

武田方より山本勘助晴幸に借景虎が軍法を見て心憎く思ひけ
れども晴信と勧めて中様臣景虎が軍備へと考へ候を聞しる違い
ども中〻容易に敵よ候いでと今度越中に発向こそ社幸ひ間者を
遣されて景虎が軍の様を能く見聞せ給へべしと申されば馬場民
部が補内藤修理正進出當時の諸大將智愚剛億の評見る
と聞るに按配に秀るあり聞しよりおろかなり景虎が軍略名
高しとは雖も當家と對陣の体とて小若大將なりが故に又い
當家と怖るに足る動もられば軍を無くて見候い軍法の足
ざる所に深く謀略ある処に基等が量知る所に非ざる大敵とも恐れ
ざる山本氏の新法よりも定めて深く思慮ある所と存候
云ふなり此間者に大切に事に候一箇中に越中安内の者二箇

中に若侍つく景虎に覚られおべ敵と怖るに似く當家に武
威と矣ひ候得べくへ搦くるも其場と切抜べき勇猛堅固
雑兵利口の者と遣さるべしと申られば晴信も此事尤なりとて
故小幡入道日淨が六男小幡弥三左衛門尉に勇猛剛力にして軍
学に秀る者に宗洞宗の會中大益徳加れに知識にて剣戟の中
にも怖ざる悟道徹底の僧と添て遣し給ふ両人忍んで
越中に遣はされ各〻間者に軍中必用の一級に敵國の風俗
山川平岨の地理大將の強弱士大將の和不和と家中の者の
巫百姓狙公所聊僧等に身を変じ或は隠形の術を修し
門戸に依て陣中に出入を忍術者にて甲越に功
者の忍盗と撰び諸國に分て或は國人と三人も懐け

至りて微細の事迄石坂ぶ小知り給へり美濃の国の
石坂撿校といつる聲者あり琵琶の名手にて平家と語りて
と得く聞人よ感と俗さしめられば軍勢の間中に石坂と拓に
平家と語らせ疲労と慰め興せり石坂生質伶利輕辯の者な
まだ諸士のなよ適ひ目あれば人くもんと中くに尽ぶ小
己が懇よ引されとりされて諸大將の密事と武田家小告られ
バ家〳〵此石坂が方よりぞ晴信〳〵知り給景虎石坂撿校
が琵琶の妙手ある事と聞給ひ一時石坂と呼ぶ平家物語の
鶏の段と語らせ聞給ひしば石坂も時こそ至れと精神と
凝し最面白く語りられば皆心耳と傾け聞りが景虎へ頻よ
落涙ありられば大將も石坂が秘曲よ感涙あり〳〵ふふ

一曲終りて人くみ面ひ給ひ今石坂が語りよ付て我朝の武勇ぶ
んあり時代と考ふる小鳥羽院の御時内裏妖怪ありて帝
御脳中〳〵〳〵間八幡太郎義家殿上の下の口小候しく
強し鎮守府將軍陸奥守源義家と名乗れば妖怪忽
ち形と消し御脳も平癒給ひ〳〵化鳥猶働きくこめと
頼政兵破の矢にて射落ちとぞ化鳥猶働きくこめと
偖の早太九刀迫刺留めて漸よ車源〳〵義家が鳴弦せしち
鳥羽院の天仁元年あり頼政が鵺射〳〵〳〵近衛院の仁平三
年真間去る事僅四十六年あり武徳のおかれる事遥あり況
や景虎が頼政よ後れる事四百五十年吾又頼政よおかれる事
遠くべき小〳〵覚へど涙の流〳〵小世と作せられば名ねい武の志

厚沢事須臾も忘れ給はざりしかども各威儀をほ和石坂の
引出物多く贈り思ふ子細あれば當國に足と止むべからずとて國
境より追放ち給ふと不審しく思ひしが後小敵の間者と捕へ
て石坂が親國に通ぜる事を知られ遂に僅鶏一段の間に
其様と察し明智と人皆恐れあそれ
瞽者が平家語る濫觴も後鳥羽院の御時信濃前司
行長入道平家物語十二巻を著して生佛と謂る瞽
者に教ゆ生佛此物語を琵琶に合して語りて
傳へて瞽者の獻とあり見と琵琶法師
とふ其清声に清亮あらざるも生佛が声に擬
似たるとあり

愛に相州小田原に城主北條左京大夫
累祖と尋ぬる桓武天皇より七代の後御肥前守平惟將五代の
孫北條四郎時政が末流相摸治郎時行といふ者曆應元年に
春後醍醐帝に七の宮と供奉仕奉り結婚入道道忠と奥州
下向の時伊勢國安濃津の浦にて難風に逢ひ終に伊勢國に
居て其妾男子を生む伊勢小次郎時長
と名乗せ其五代の孫に伊勢新九郎長氏といふ豪傑あり其時
駿州の今川修理大夫氏親に仍て遊客となり武功を
巨國並山の城と為る是より先寛正二年足利將軍義政公の命
政知伊豆國に下向し堀越殿と申ふ在國三十三年明應二年

厚く事須臾も忘れざる給ひざりしかば各威儀をほ和石坂の
引出物多く贈り思ふ子細あれば当國に足と止むべからずして國
境より追放ち給ふと不審しく思ひしが後小敵の間者と捕へ
られ石坂が親國に通ずる事を知られ遂に一段の間に
其様と察し明智と人皆恐れあるべし
聲者が平家語る濫觴も後鳥羽院の御時信濃前司
行長入道平家物語十二巻と著して生佛と謂る聲
者に教へ生佛此物語を琵琶に合して語りて
傳へて聲者の祖となり是を琵琶法師
と号ふ其語声に清亮なるぶを生佛が声に擬
似たりとぞ

愛に相州小田原に城主北條左京太夫平氏康と云大將あり其
累祖と尋ぬる植武天皇より七代の後胤肥前守平惟將五代の
孫北條四郎時政が末流相摸治郎時行と云者曆應元年に
春後醍醐帝に七の宮を供奉仕奉り結城入道道忠と奥州
下向の時伊勢國安濃津の浦にて難風に逢ひ終に伊勢國に蟄
居し其妾男子を生ぶ伊勢小次郎時長
と名乗せ其五代の孫に伊勢新九郎長氏と云豪傑あり其時
駿州の今川修理大夫氏親に仍て遊客にあり武功を
豆國韮山の城に居る是より先寛正二年足利將軍義政公の命
政知伊豆國に下向し堀越殿と申ふが在國三十三年明應二年

585

政知卒去し伊勢新九郎ときと龍衣ひ対く豆州と押領し北條と
住し後剃髪して北條早雲入道と号を同九年相州と伐て小
田原の城と住と後柏原院永正十三年甚子左京太夫氏綱と共
と三浦入道道寸同じく荒治郎義意と殺し新井の城と
拔同十六年八十八歳にて卒し甚子氏綱猶威勢盛んにて父早
雲が箕裘と續ぎ武名隣國に鳴氏康が子左京太夫氏康あり
氏康父と劣らぬ勇將にて武威益盛んと軍と隣國に出して
地と爭ふ就中管領職上野國平井の城と有る上杉民部太夫
憲政と代て于戈と爭ひ上州と平呑ひんと望れし所に甲州の武
田晴信軍馬と上州と出し上杉旗下の安中越前守和田倉ヶ野松
井田等の九將と戰ふよし聞へしかば氏康大いに怒り北條上杉

連年鋒先と爭ふ事甚と至りて三代あり然と甲州の武田晴信
度々軍と上州に出て箱根と攻撃し竟に上杉家と亡し上
州と武田の有とせられしも其が數年の骨折再餘とあるべし
と諸大將評議しり幸ひ駿州の今川治部太夫義元と武田
と緑あるに今川と頼て晴信が上州發向と止むべしと山門伊
豫守一宮隨巴と後州と使し今川義元と頼まれし氏康
両上杉と合戰と挑し候事其に至りて既に三代に及ぶ然も敵に
時に必勝攻に時に必敗と無元亨上杉大身にて有れば是ご根
と斷く業を拔と事と得ざるに氏康軍と練く近くと
州と發向し有無の一戰といひ上杉家と永く亡さん事と思惟と
る如に近来武田晴信上州と度々發向して手と懸給へり良

某が数年の骨折と察し給ひ武田家より上州ゆゑとうけ給ひて
と思ひ止まるべき給ひ氏康が本望是より過ぐ候然ども晴信心猛き
大将と恐るべしいかべ氏康ゆゑ遣はす事もいまだ今川殿へ
親しき御縁者ゆ候間べき所より仰入られ候ゆゑ違変
候間帝偏に此事と頼み存ぜず上言と恭して頼とられば沿郡太夫
義元弾諾あり遣と飯され天文十九年九月重九嘉儀の使者
して四宮右近と甲州より遣はし庵原弥兵衛尉と副使武康
ゆゑ頼みの旨と言送る武田は老臣等いろ〳〵返答あるべきと評議
る中ゆも原加賀守昌俊諸角豊後守昌清の両士蹉跎
大ゆ悔み玄年軍と上州より出る時松井田の安中城中一塚あり
攻落しゆゑんゆ於て治めうけ〳〵ふ国あれば其義ゆ同じ

空御返答あるべん物と小笠原本国が出張ゆ軍と班れ
一塚とも陥さねば流石ゆ今川が頼み否とも仰せ
急ゆ軍と出して攻らるるも速ゆ其功あるべかり上杉ゆ領
国ゆ手と出ゆ事と得ざるゆ今ゆ陸国と代陸へ大身ゆ
ゆゑと給ふべき御方便もあられば此上ゆ景虎と御和睦ゆ
上ゆ上杉領ゆ還住せ伊奈本国小笠原が領地と得給へ外へ
候ゆゑと春日源五郎飯富源四郎原隼人佐三人と以て諫書と
晴信ゆ奉り久れば晴信披見あり〳〵今川が頼〳〵諫止
州発向の事ゆ思ひ止り候べしと返答あって今川が使者と帰さ
ゆ原諸角西人が悔み中所起り晴信今度景虎ゆ景
虎と和睦ゆ伊奈本国小笠原ゆ三家と一日の中ゆ討亡し

588

あうこゝる何の甲斐やあるべき晴信こゝて景虎が武威に恐怖て和睦
ちゝ[illegible]んと〻天下の人は後指さゝれんい末代迄の瑕瑾なり此程長尾
へ返答せしかもけう村上と信州に還住さゝせん事を所願無指も
照覧あれ存もまゝざる処なり木曾小笠原と討ん小笠原景虎が和
親と絶人や景虎三家小カと今に無恐べきに兆びかて即日小山田
左兵衛尉板垣弥二郎海ホ両人ゝ下知紡ホ打出深志表拮捗ゞ系へ
働くべしと聖十月晴信軍と整へ信州へ発向あり

法福寺合戦の事

備も武田晴信公の鬼人の連ゝと入玉ひ直に進殺あり〻〻先陣久
郡ホ押出し給ふ諸将軍令と守り海野陣と打越く法福寺ホ陣
と居られ〻小笠原長時為て朝〻〻る事あれば早く馬倉峠と

打越甲州の先陣へ無二無三に打かゝ鉄炮と打弓と射かけ〻こ西
ようも繁く武田方ゝ先陣飯富兵部少輔小山田備中守芦田下
野守等諸勢と下知して励ま一自鎗カと振て爰と破ゝまゝと戦ふ
両軍の矢鉄飛行とゝ者百千の雷鳴事〻ホ異ゝ双方ゝ士乗ん
命と塵界ゝも軽んゝ義と金石ホ比〻〻火花と散せ共長時
の正撰ゝ嬢ん甲州勢覚ゝ二三丁ゝ引退く先鋒斯の〻〻
ゝれば衆将等倍明れ〻〻ゝ既ホ惣勢四度路ホ〻ゝ敗走
さんと見へる処ホ故耳利備前守ゞ嫡子耳利孫蔵今年十七歳ホ
つゝゞ去める九日左三門尉ゝ任ゞ甚上淳字の晴と給て耳利左三門
尉晴吉と号ゝ父ホ劣らぬ大剛の勇士ゝ〻ゝ今日の陣列ゝも晴信
公旗本の家備への将と勇ゝて打出ゝ〻ゝ先陣の将士長時ゝ切ゝれ

斯崩れうるを見て采配を打振り愚なる士卒共を甲斐なき將
士等長時何程の勇ありて為味方の比をれば十分の一なりも有まじいうられば
既に恩の振舞ゝて武名を汚さんや殊更大將の御旗本なるぞ
此処なる北条氏政ゝていりの君恩を蒙ぶりて數級の首を
討取返せる者どもと場所を隔へて足を引ぎ嚴しく下知ありれば
難なく守り返して勇を励まし飯富小山田も是を撲て滑く諸
士ゝ長利も備を分て左右より敵を切崩と信濃勢此壯士を
切立ては敵ふもなく敗走に長時馬を引返し勝色に軍なるぞ
返せくと泉を擬下知ありれど早崩を立て士卒なれば長
時の言耳ふもなけど敗走を制止ぬ邂逅むざゝ右衛士なるも押立て
もてくむなりびも支山明れて鄙倉峠と例城拠本とさて敗北と

甲州勢を逃る敵と追ゝて一先軍と囲め諸將の功労を賞し
給ふ耳利晴信手へ討取首負二百七十三級先手の諸將へ討取
首数百四十六級凡く雑兵共を討取首数百十九級なり諸將大
ゝ悦び勢ひと接ゝて松本へ乱入り小笠原長時と攻合さいう
ふと雖評勇ましく早討ましんと又々の処へ長尾勢又海野平へ
新城出張の中注進ありられば晴信ゝ長時を小敵なれば
閣き城後勢と防んと其用意ゝ給ふ此度法福寺表の
合戦小敵富岳郎少輔が男源四郎春日源五郎の両人比類なる
働ゝ晴信感状を賜うぬ